

# 社会科の過去、現在、未来

安田女子大学教授 片上 宗一

## ■社会科の原点——社会研究科

みなさんは、社会科の英語名をご存知でしょうか。「Social Studies」という。つまり、子どもが社会研究を行う教科ということである。

私は、社会科の原点は、まさにここにあると考えている。注目したいのは、社会研究の「研究」という単語が、単数形のStudyではなく、複数形のStudiesになっている点である。

ここには、二つの重要な意味が込められている。一つは、ただ一つの見方、一つの視点といった狭い立場からの研究であってはならないこと。もう一つは、その研究が、子ども個々による場合だけでなく、子ども同士、さらには教師と子どもとが協働しての研究でもなければならないことである。したがって、社会科の授業がそのようなものにならなければならない。それは、社会科の名に値しないということになる。

## ■夢と希望を与える新教科社会科の誕生

社会科の原点を前述のように押さえておくと、なぜ第二次世界大戦後の我が国に社会科が誕生したのか、その理由がはつきりしよう。

戦後の日本を根本から立て直し、新しい社会を建設していくためには、若い主人公である子どもたちが社会の事柄を主体的に研究し、判断してい

けるような新しい教科が、そして子どもと教師に夢と希望を与えられるような教科が、是非とも必要だと考えられたからであった。

問題は、子どもによる社会研究を促し、支援することのできる方法論とは何か、ということであった。それが社会科という教科を形作る柱となるからである。その柱として導入されたのが、「問題解決学習」であった。というのも、子どもにとって社会研究の出発点となる対象は、それまで(戦前)に教えられていた歴史科や地理科のように、自分の生活とは関係のない、遠い過去の世界や他所の事柄ではなく、子ども一人ひとりが生活している家庭や地域といった「社会」での事柄であり、そこでの問題である。だから、そこでの実情を調べ、問題を発見し、その問題の解決に向けてさまざまな学習活動を展開する。そのことこそが、子どもにとって可能で、意義のある社会研究としての新しい学習だ、と受け止められたのである。

それゆえ、地理や歴史は、「問題解決学習」としての社会研究をより生産的に展開するための、過去や他所との比較といったアプローチに形を変えて、位置づけられる。こうして、社会を研究する教科としての社会科は、地理や歴史などに分化されない総合社会科として、小学一年から出発することになる。そしてそのような「問題解決学習」

による総合社会科は、日本や世界の事柄にまで視野を広げつつ、高等学校の一年まで続く。それゆえ、地理や歴史などの領域に分かれる分化型社会科は、わずかに高校二・三年のみの学習に留まっていたのである。

## ■社会科の変質

だが、その後の流れはどうだろう。高度経済成長などの社会の変化や、受験重視の圧力、教育論の変化などによる影響を受けながら「社会研究型」の社会科は、その性格を変え徐々に、「社会的事項教授(学習)型」の社会科に姿を変えていく。その結果、総合教科としての社会科は、地理や歴史などの領域に分かれる分化型社会科へと変質していった。そして、子どもによる社会研究のための方法論として導入されたはずの「問題解決学習」も、社会的事項を効率よく学習させるための手段に矮小化わいしょうかされていってしまうのである。

## ■二十一世紀にふさわしい社会科とは

では、これからの社会科はどうあるべきなのであろうか。いうまでもなく二十一世紀は、激しく変化する新しい時代である。子どもたちはその時代を切り拓いていかなければならない。当然、第二次世界大戦後とは異なる新しい学習原理に立つ社会研究科としての社会科が求められていると考へたい。

振り返ってみると、戦後初期の社会科は、子どもの社会研究を促すことには成功したが、それを鍛えるという点では不十分であった。そのため、子どもにどのような学力が育ったかが、曖昧で

あった。

二十一世紀の社会科学は、変化する社会に対応させて子どもの社会研究の力を鍛え、①社会科的技能（スキル）②社会認識力（社会的見方・考え方）③社会形成力の三要素からなる左図のような学力を育てる必要がある。そのような学力を育てられる社会研究科としての社会科学であってこそ、先行き不透明で変化の激しい時代を生き抜く子どもに役立つ教科たり得ると思うのである。

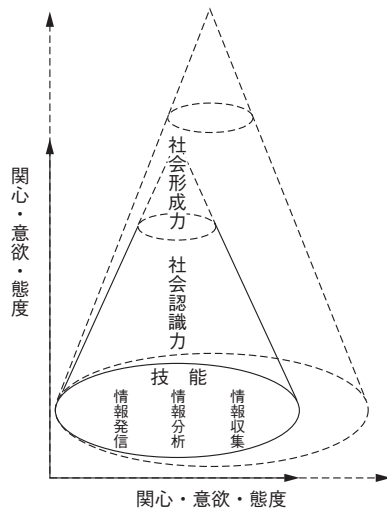


図 これからの社会科学力の全体像

### ■学力の三要素に応じた社会科学学習の革新を

問題は、どうすればそのような学力を育める社会科の授業が創れるかである。戦後初期の社会科学のような「問題解決学習」一辺倒では、不十分であろうし、今日、一部の学校に見られるような「総合的な学習の時間」と見間違えような活動中心型の社会科学学習では、達成が難しいであろう。

では、どうすればよいのだろうか。学力の三要素のうち②と③については、新しい学習原理を立てることが必要になろう。

私は、②社会認識力を育てる授業の場合なら、

「問題解決」だけではなく、それにプラスして「問題構成」による社会科学授業もやってみよう」と提唱している。簡潔にいうと、小単元レベルで学習問題を二つ作って、学習の過程で視点を転換させ、追究し続けられるような授業である。

例えば、安土・桃山時代の学習で秀吉を取り上げる場合なら、A「どうして秀吉は検地や刀狩りをしたのだろうか」という学習問題に加えて、B「どうして百姓（農民）は一揆などを起こせなくなるのに刀類を差し出したのだろうか」といった学習問題を生徒と共に追究するといった授業になる。Aの学習問題を追究すれば、この時代についての「基礎基本」の習得はできるので、Bについては、正解を求めるようなことはせず、生徒の個性的で深い追究を促し、支援するということになる。もちろん、毎時間そのような学習は無理なので、教師の側が、ここは（歴史を考える上で）重要だと思うところを取り上げて、授業化を図ることになる。

では、もう一つの重要な学力となる③社会形成力の場合はどうだろう。私は、「意思決定」にかわる「調停」を原理とする授業を、と主張している。これまで、公民的資質の中核をしめる社会的判断力の育成に関しては、いわゆる意思決定学習に取り組ませることが中心であった。意見が対立する社会の中の論争問題を取り上げ、根拠を出しながら議論させ、最も良いと考えられる解決策を決めさせる学習である。

ところで、新学習指導要領では、「持続可能な社会」の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力を培うことが重視されている。これが

らの社会を見据えると、社会的判断力を踏まえての社会形成力や社会参画力の育成がますます重要になるというわけである。従って、教室内での「合理的な意思決定力」だけでは、校門を出でずと成って、社会形成力や社会参画力の育成まで到達しないと考えられる。

社会形成力や社会参画力を育成するためには、子どもたちの社会的判断を「オールオアナッシング」の状態に陥らせてはならない。つまり、社会の事柄・問題に対して、あるべき解決策のみを考えさせて、それで事足りりとするような学習では不十分である。ますます高度化・複雑化する社会は、ただ一つの解決策では処理できにくくなる社会であるといえる。次善の解決策、次善の解決策をも考えられる力が求められてこよう。さらには、それらの解決策を調停し、より実現可能な方策に具体化させていくといった力も求められてくるだろう。そして、条件に応じて（予算や人々の意識など）、それらの間に優先順位をつけて自分の考えを出し、それを粘り強く外に働きかけて実現していく力が求められる。

ところで、そのような力を育成する授業は、どうすれば実現することができるのだろうか。それには、論争問題を冷静に分析して、考えられる選択肢の幅を広げる手立てや、それらの間に優先順位をつけて実現の見通しを立てることのできる「ランキング」の手法などを開発する必要があると考えられる。

課題を明確にして、その解決を図り、再び日本子どもたちに夢と希望を与えられる社会科学を創り出したいものである。